美術

今だからこそ、物と触れ合い、自由に表現する図工・美術を

竹内美弥

今年度の東京教研で、中学生の描いた「戦争・平和」の作品が参加者の大きな共感を呼びました。ピカソ作「ゲルニカ」の鑑賞、難民の少年の体験談や、日本国憲法の学習を通して子どもたちが戦争を自分事として捉え、「戦争」「平和」の場面を自由な描画材料を用い抽象やマンガも含め様々な表現方法で生き生きと描いたものでした。美術の授業は、教科書にとらわれずに題材を組み立てることができて、子どもたちと一緒に考えながら授業を作ることができ、一人一人が自分自身の美・真理を自由に追求して表現できる教科なのだからと授業者が強調されていました。現実の戦争を前に平和について深く取り組んだ実践であること、自由に表現するという図工・美術科の本質を具体的に表した実践でした。

このコロナ禍での三年間、図工・美術の研究に一番大切な、作品を持ち寄って部会を開くことはとても困難でした。しかし、学校の図工室・美術室の中から、「描いたり、物を作って楽しく遊び、集中する時間」がどんなに子どもを救い、子どもの心を支えているか。作る中で友だちとのつながりや学び合い、自分を自分として肯定し成長していく姿がいくつも報告されました。

「作文や図工・家庭科が苦手、手先を使う仕事からは逃げる、自分の気持ちを意思表示することができなくてすぐに固まってしまう」、こんな言葉で小学校から申し送りのあった中学生が、一学期を振り返って「美術の粘土（自分の手を作る彫塑）が楽しかった」とコメントを書いていました。彼が苦手なのは国語や美術だけではなく学習全般に自信を失っているのですが、きっと粘土の触感から伝わる心地良さと、彫刻家になったつもりで本物らしさを追求する粘土の制作は、中学校入学という不安から意欲につながる一つのきっかけになったのではないかと感じました。

コロナ禍以前から大きな課題であった不登校の問題は、ここでさらにその数を増やしています。働く大人も限界を超えるような忙しい学校の環境の中で、子どもたちは悲鳴を上げ続けています。こんな時だからこそ、タブレットのような狭い画面で指先だけをタッチする感覚ではなく、身体全体で紙や絵具、粘土や木、金属など様々な道具にじかに触れることの大切さ。無心に一つのことに向き合える制作、気づいたら隣の友だちも同じ感覚を一緒に味わっていた、という喜びを感じられる図工・美術が大きな役割を持つのではないでしょうか。授業を通して子ども一人一人が生かされることを学べる場になるようにしたいと強く思います。子どもの作品を囲み、みんなで語り合いましょう。

（多摩市・公立中）